

§ 6 物語的説明とは何か (その2) ヘイドン・ホワイトをもとに (つづき)

2、ヘイドン・ホワイト『メタヒストリー』(1973)の骨子

#クロニクル、ストーリー、歴史記述

ホワイトによれば、「クロニクル」から「ストーリー」を作ることは、次の問いに答えることである。

「次に何が起きるのか」

「それはどのように起こったのか」

「なぜものごとはあのようにではなく、このように起こったのか」

「事態はどうなるのか」

という問いに答えることである。この「ストーリー」は、まだ「歴史的記述」ではない

「ストーリー」に、他のありうる「ストーリー」との関係において、全体を見通した評価を与えることは、次の「より包括的な問い」に答えることである。

「全てはどのような結末になるのか」

「結局要点はどういうことか」

この「より包括的な問い」への答えが、「歴史的記述」になる。この問いに答える仕方には、3段階ある。

(1)プロット化による説明

(2)形式的論証による説明

(3)イデオロギー的意味による説明 (58)

(注：ここでの「クロニクル」「ストーリー」「歴史的記述」の区分は、前回紹介した『歴史の喩法』の第4章「現実を表象するにあたっての物語性の価値」とは異なっている。後者は1980年に雑誌論文に掲載されているので、後者の方がより後の立場であり、より明確に整理されている。)

(1)プロット化による説明 58

プロット化とは、「物語られているストーリーの種類を特定することによって、ストーリーに「意味」を与えること」58である。「プロット化は、ストーリーとしてこしらえられているひと連なりの出来事が、特殊なストーリーなのだということを一步一步明らかにするのである」58

ヘイドン・ホワイトは、ノースロップ・フライの『批評の解剖』にしたがって、4つのプロット化の様式を述べる。それは、「ロマンス」「悲劇」「喜劇」「風刺劇」である。(彼は、「叙事詩」は、これ以外のプロット化の様式であるという。また、彼は、あるプロットの部分が、別の様式のプロットになりうることを認める58)

「歴史家は、自分の物語を構成するストーリーの全体的なまとまりを、一つの包括的ないし元型的なストーリー形式においてプロット化せざるを得ないのである」58

「重要なことは、あらゆる歴史は、それがいかに「共時的」なもの、あるいは「構造的」なものであったとしても、きまって何らかの仕方プロット化されざるを得ないという一点である。」58

{なぜ歴史や物語は、プロット化されざるを得ないのだろうか？

「何が起こったのか？」という問いに対する答えが、プロットであろう。チョムスキーが言うように、私たちは、新しい文を無限に作り出すことができる。それを可能にしているのは、文を要素(語句)から合成する規則の回帰的な適用可能性である。プロットもまた、要素から合成されるのだとし、その合成規則を回帰的に適用可能であるとすれば、無限に新しいプロットをつくることはできないのだろうか。しかし、英語に5つの基本文型があるように、プロットにも基本プロット型があるということだろう。文の最も基本的な型は、主語+述語である。プロットの最も基本的な型は、始め+中間+終わり、である。

文のこの基本文型は、「Sは何か」—「Pです」、「何がPか」—「Sです」という問答によって、文の学習がおこなわれ、問答において、文、つまり主語と述語の結合／分割が成立するからであろう。

物語は、「Xはその後どうなったのか?」という形の物語的問1、あるいは「XはなぜGになったのか」という形の物語的問2に対する答えとして、語られる。問1は、Xについて何らかの知識を前提しており、それを「XはHである」のように明示化すれば、それは物語の始まりとなるだろう。問2は「XはGである」を前提しており、その発生を説明する物語において、それは物語の終わりとなる。もし物語が、このような物語的問いへの答えとして語られるのだとすると、物語は、始め+中間+終わり、という形式をとることになる。

ロマンス、悲劇、喜劇、茶番劇、の4つのプロットは、「Xはその後どうなったのか?」という問いへの答えの諸形態になりそうだ。4つのプロットの違いは、結末の違いであるように見える。

ロマンスの結末は、意図の実現であり、喜劇の結末は、偶然的な意図の実現であり、悲劇の結末は、不幸の到来、茶番の結末は、意図の挫折（人間の無力さの露呈）。}

## #ロマンス

「自己確認のドラマ」「勝利のドラマ」

## #風刺劇

「救いなど存在しないぞ、というドラマ」60

「人間が究極的には世界の支配者であるどころか、むしろその虜なのだという理解である。」60

## #喜劇と悲劇

これらは、「墮落によって現在を負うという運命的な条件から人間が少なくとも部分的には解放されうること

を表し、人間が投げ込まれた分裂した状態から一時的にしる救われる可能性があることを暗示している。」

60

## 喜劇と悲劇の収穫

「喜劇においては、人間が自分の世界に一時的にしる勝利するはずだという希望が保持されており、社会的

世界や自然的世界のなかで作用する諸力が和解しあうときもあるのだ、という期待をはらんでいる。」60  
「悲劇においては、欺くためのものや幻想上のものを除けば、祝祭的な事件というべきものは存在しない。むしろそこにあるのは、人間と人間のあいだにはきまって分裂状態があるという暗示である。こうした《存在の状態の分裂》は、ドラマの始まりにおいて悲劇的な葛藤を惹き起こす《出来事としての分裂》よりもいっそう過酷なものである。」60

悲劇の収穫は、「人間の実存を支配する法則がそこに顕現したとついに理解することである。世界に対する主人公の努力がこの認識を達成したのであるから、悲劇のプロセスはある積極的な契機を残したことになる」

60

## 喜劇の和解と悲劇の和解

「喜劇の結末にある和解は、人間と人間の和解であり、人間と彼が住む世界や社会との和解である」61

「悲劇の結末に生じる和解は、もっとずっと陰鬱である。」「悲劇は、世界の中で平和で穏やかな生を送ろうとするときに人間は何を望んでいいのか、何をもとめていいのかに関する限界を定めているのである」61

## #風刺劇

「芸術様式や文芸の伝統が発達していくときの一段落として、**風刺劇**という表現様式が登場してくるものだが、芸術史においてこのような段階に到達したということは、その時点で世界はすでに老成してしまったという信念が生まれたことを表している」61

{このような4つのプロットの結末について、「XはなぜGになったのか」と問うならば、その答えは、次の形式的論証によって与えられるだろう。}

## (2) 形式的論証による説明 63

プロット化よりも「もう一つ抽象度の上がった概念化のレベル」がある。これが「形式的で、明示的な言説を通じた論証による説明」63である。

「歴史家は法則定立的一演繹的な論証を構築することによって、出来事をストーリーの中で説明する。」

63

「この論証は三段論法とでもいうべき形式からなっている。大前提にあたるものは、一般に普遍的だと思われている因果関係の法則性である。小前提は、その法則が適用される限界条件である。そして三段論法の結論においては、実際に生じた出来事が、普遍的法則性としての大前提と適用条件としての小前提から論理的必然性によって演繹される。」64

この一般法則の最も有名な事例は、マルクスの「土台と上部構造の法則」である。「土台（生産手段と生産諸関係）に変化があるときにはいつでも、上部構造（社会的、文化的制度）の構成要素にも変化が生じるが、逆はおこらない（たとえば、意識における変革が土台における変化を惹き起こすことはない）。」64 別の例は、「悪貨は良貨を駆逐する」「盛者必衰」（これらは、20世紀の大恐慌やローマ帝国の衰退を説明するときに使われた）などである。

プロット化と論理的論証は段階が異なる。

「「何が起こったか」「なぜそれがそのように起こったか」を描くこと（プロット化のレベル）と、ある状態から他の状態へと普遍的な因果法則によって導かれる展開過程として物語の形式で言語的説明モデルを提示すること（形式的論証のレベル）とは、はっきりと別のことだと考えられる。」65

{入江は、「なぜそれがそのように起こったか？」という問の答えは、形式的論証になると考えます。}

ホワイトは、スティーヴン・C・ペッパーの『世界仮説』をもとに、「歴史的説明のために採用できる4つの形式的範例」66を述べる。この4つとは、個性記述、有機体論、機械論、コンテキスト主義、である。

### 《個性記述論的説明》

「個性記述論は、一定の客体が特定され、その類や種、あるいは属性や特性に即してしっかりとした規定が与えられていれば、それで説明が十分に行われたと考える。そこで言及されている客体は、個体が集合か、特殊か普遍か、具体的実体か抽象か、そのどちらであってもいい。」67

「ヘルダー、カーライル、ミシュレといったロマン主義的な歴史家か、あるいはニーブール、モムゼン、トレヴェリアンのような偉大な歴史的物語の作者」

### 《有機体論的説明》

「有機体論的戦略はその核心において、マイクロコスモスとマクロコスモスが照応し合うという形而上学的パラダイムに支えられている。有機体論的な歴史家の傾向としては、全体を部分の総和よりも大きく、質的にも違ったものであると考えがちであり、個々の存在とは全体へと凝集していく過程を構成する要素なのだ」と理解しがちである。」68

「国民主義的」歴史家たちの大半（つまり、ジュベル、モムゼン、トライチュケ、スタブズ、メイランドなど）70、およびヘーゲル。

「この様式で構想される歴史的な議論は、どこか「抽象的な」性質を持つ。また、この有機体論的な様式でえがかれている歴史は、終局ないし目的という歴史過程の帰着点を重視する傾向があり、歴史の場に浮かび上がるあらゆる過程は、その帰着点を志向して運動すると想定される。」70

「有機体論者は、法則の把握を目指すのではなく、歴史の場において識別される個々の過程や、それが全体としてまとめて捉えられたときのあらゆる過程に浸透している「原理」と「観念」について論じががる傾向がある」72

### 《機械論的説明》72

「機械論的世界仮説は、それが目指す方向を見ると有機体論の場合と同じように議論の構築の仕方が統合的であるのだが、それによって総合的に一つにまとまるというよりも、むしろ特定の因子に還元しがちである」72

「機械論者にとって完璧な説明とは、自然を支配するという物理法則と同じような法則を、歴史の中に発見することである」73

実例は、バックル、テーヌ、マルクス、トクヴィル

### 《コンテキスト主義的説明》

「コンテキスト主義という概念が意味しているのは、出来事とは、それが発生する「コンテキスト」の中に組み入れられることによってはじめて説明できるのだ、という立場である。なぜ出来事がしかるべく起こったのかは、それを取り巻く歴史的な場所の中で起こっている他の出来事との特殊な関係性を明らかにすることで説明されなくてはならない。」74

実例は、ヘロドトス、ホイジンガ、ヤーコプ・ブルクハルト。

### #互いのイデオロギー間の論争

職業的な歴史学者やポッパーは、機械論的思考と有機体論的思考を批判する。これに対して、「急進派は、職業的な歴史家たちがコンテキスト主義や個性記述論に基づく説明戦略を取りたがる背後には、イデオロギー的な動機が控えていると頻繁に主張する。」79 「急進派は歴史的構造や歴史的過程の「法則」を発見したと主張するが、こうした主張を、自由主義的な歴史家は、同じようにイデオロギー的に動機づけられているものだとみる」79

「事実を歴史的に評価する場合にはつねに、それ以上還元できないようなイデオロギー的な構成要素がそこに現れてくる。要するに歴史は科学ではない」79

### (3) イデオロギー的意味による説明 80

歴史家は、歴史についての一定の立場を引受けているが、「その引受けられている立場に含まれる倫理的要素を表しているのが、歴史的な表現の中のイデオロギー的次元である。」80

「この「イデオロギー」という言葉で私が言おうとしているのは、社会的実践という現在の世界の中で一定の立場を取り、また（その世界を変革する方向であれ、いまある状態を維持する方向にであれ）それに働きかけるように命じる社会的規則や命令規範の束のことである」80

ホワイトは、マンハイムの『イデオロギーとユートピア』の分析に従って、基本的イデオロギーを4つ立てる。アナーキズム、保守主義、ラディカリズム、リベラリズムである。（他にも、終末論、反動派、全体主義などあるが、「これらは、自分たちには内在的な応答責任があるとは考えていない」82。）

#保守主義者は、社会的な現状が新しい革命のプログラムに沿って変革されることについて、もっとも懐疑的な姿勢を取る。それに対して、自由主義者と急進派、それにアナーキストは、変革一般について懐疑的である度合いは相対的に小さく、したがって、社会的秩序の「急激な」変容が起こるといふ未来の展望に関しては、多かれ少なかれ楽観的である。

#### (4) 歴史叙述のスタイルという問題 91

彼は、プロットを、フライの『批評の解剖』にならって、4つに区別する

ロマン主義的、悲劇、喜劇、風刺

彼は、論証を、スティーヴン・C・ペッパーの『世界仮説』にならって、4つに区別する。

個性記述、有機体論、機械論、コンテキスト主義

基本的イデオロギーの立場を、マンハイムの『イデオロギーとユートピア』にならって、4つに区別する。

アナーキズム、保守主義、ラディカリズム、リベラリズム

喩法 (tropics) (歴史叙述のスタイル) を、ヴィーコ『新しい学』にならって、4つに区別する。

隠喩、換喩、提喩、アイロニー

これらは、次のように対応しているという。

	プロット	論証様式	イデオロギー	喩法
	ロマンティック	個性記述	アナキスト	隠喩 (代理表象)
	悲劇	機械論的	急進派	換喩 (還元主義的)
	喜劇 (和解)	有機体論的	保守的	提喩 (統合的)
	風刺劇	コンテキスト主義	リベラリズム	アイロニー (否定表現的)

{プロットは「ストーリー」に、論証様式は「歴史記述」に、イデオロギーは「歴史哲学」に、対応しているように見える。}

#### #喩法の理論 94

「伝統的な詩学も現代の言語理論も、詩的な(poetic)言語を分析するために、言い換えれば、形象を創出する(figurative)言語を分析するためには、基本となる4つの喩法があると考えている。それが隠喩(Metaphor)、換喩(Metonymy)、提喩(Synecdoche)、アイロニー(Irony)である。」94

ホワイトが喩法に注目するのは、喩法が、経験的世界(あるいは物語世界)を先行的に形象化している、と考えるからである。

#### 隠喩

「隠喩(もともとのギリシア語の言葉通りに取れば「転義」)においては、諸現象を、互いに類似点があるとか、互いに差異があるといった観点で、類比や比較という方法によって特徴づけることができる。その実例が「私の愛よ、バラよ」という表現である。」94

#### 換喩

「換喩(メトニミーというもともとのギリシア語の字義通りにとれば「名前の交換」であるが)を通じては、あるものの部分の名が、その全体の名と置換されることが可能である。それは、「50隻の船」を表すのに「50柱の帆」という言葉をもちいるようなものである。」94

#### 提喩

「提喩は(これを換喩の一形式とみる理論もいるが)全体的なものに内在すると考えられる一定の性質を部分が象徴することで、ある現象を記述することである。それは「彼は真心そのものだ」という表現を実例とする」94

#### アイロニー

「アイロニーによっては、文字通りのレベルでは肯定的な言明と見えることを、形象的なレベルにおいて否定することで、ある存在が特徴づけられる。「盲目の口」というような、明確に不条理な表現の

形象（カタクレーシス、つまり濫喩）や「冷たい情熱」というような明らかなパラドクス（オクシモロン、つまり撞着語法）が、この喩法の典型例と理解できる。」94

「**隠喩**は本質的に**代理表象**するものであるのに対して、**換喩**は**還元主義的**であり、**提喩**は**統合的**であり、**アイロニー**は**否定表現的**である」96

#### ・隠喩の分析

「わが愛よ、バラよ」という隠喩表現は、バラの姿が、愛される人の代理表象にふさわしいと言い切っている。それは、二つの客体には明らかな差異があるにもかかわらず、類似点が存在するという主張である。しかし、愛するひとをバラと同一化することは、もっぱら言葉の上で主張されることである。この詩句は、形象として受け取るように求めている。[...]愛するひとは、換喩的に解釈された場合にそうなるように、薔薇に還元されるのではない。また、その表現が低級つにおいて理解された場合にそうなるように、愛する人の本質が、薔薇の本質と同一なものとして受け取られているわけでもない。」96

#### ・換喩の分析

「**雷の咆哮**」という表現は、換喩的である。」「雷は咆哮に、原因と結果という還元の様相で関係づけられる。」98

「換喩によって、私たちは同時に二つの現象を区別し、一方を他方の顕示したものという位置に還元するのである。この還元は、行為主体と行為の関係という形式をとる場合（「雷が吠える」）もあるし、あるいは原因と結果の関係という形式をとる場合（「雷の咆哮」）もある。

#### ・提喩の分析

「あらゆる換喩的な還元の中で現象の二つの秩序を特徴づけていると思われる本質的に外在的な関係は、提喩によっては、分有された実質の内在的な関係というあり方で解釈される。」

「提喩という喩法によって、その二つの部分は統合というあり方で解釈できる。つまり、それらは、部分の総和とは質的に異なり、しかも諸部分とそのマイクロコスモス的な複製に過ぎないような全体の中で解釈することが可能なのである。」98

「彼は真心そのものだ」という提喩においては、「全体性の要素の中にある質的な関係を暗示している言明として読むなら、それは還元的というよりも、統合的である」100

### \* 喩法と形式的論証の関係

「私たちは[...]3つの喩法を、言語そのものによって与えられる**活動の範例**として考えている。この範例があることによって、認識過程の中で問題となる経験領域がまず**先行的に形象化**され、つづいてそれが記述され説明されるという流れになる。言葉を用いるという営みそのものを通して、すでに私たちの思考は、あれこれの可能性の中から選択することができる範例を与えられているのである。例えば、隠喩は**個性記述論的**という様式に対応している。換喩は**機械論的な在り方**で**還元的な性格**をもち、提喩は、**有機体論**がそうであるような仕方で**統合的**である。」101

「また着眼点を変えて言えば、隠喩は**経験的世界を対象—対象**という観点で**先行的に形象化**する。換喩はそれを**部分—部分の関係性**として、提喩は**客体—全体**という**関係性**として可能にする。」101

「またどの喩法も、それぞれ独自の言語論的な基本要素を作り上げようとするのである。こうした言語論的な基本要素をわたしは、同一律の言語、外在性の言語、内在性の言語と呼んでもいい[...]」101

隠喩：同一性の言語：対象—対象：個性記述の様式に対応

換喩：外在性の言語：部分—部分：機械論的、還元的

提喩：内在性の言語：客体—全体：有機体論的

これらは「素朴な」喩法である。101

アイロニーは、これらに対立する喩法である。